

## 王昌齡「出塞」札記

岡田充博

秦時名月漢時關 秦時の名月 漢時の関

萬里長征人未還 万里長征して 人 未だ還らず

但使龍城飛將在 但だ龍城の飛將をして在らしめば

不教胡馬度陰山 胡馬をして陰山を度らしめじ

「秦の時代とかわらぬ名月、漢の時以来の関所。万里の彼方に遠征したまま、兵士達は未だに帰らない。

ああ、敵地龍城で飛將軍と恐れられた、李広のような名將さえいてくれたならば、胡の騎馬兵に陰山を越えさせはしないものを。」

唐代七言絶句の「庄卷」あるいは「神品」と称される王昌齡のこの「出塞」については、すでに多くの論評や考証があつて、もはや論じ尽くされた感がなくもない。私がここ何年か王昌齡を研究対象としながら、

この代表作に触れるのをためらってきた理由も、おおよそそのあたりにある。正直なところ、何十篇にもものぼる文章を前にして、斬新な「出塞」論というのは結構難しい。しかし一方で私には、他の詩人の作品中に類似した表現を偶々見つけ、しばらく思いをめぐらした体験も一度ならずある。小稿では、これまで意外に指摘されることのなかったそれらの資料の紹介を軸に、近來の研究成果にも触れつつ考察を進めてみたい。

もとより表現における影響関係は微妙で扱いにくい問題であり、手堅い論文として組み立てるだけの論拠を揃えているわけではない。おそらく望文生義の思い込みもあるが、「出塞」詩をめぐる覚え書きとして、わずかなりとも作品研究に資するところがあれば幸いである。

まずこの作品の題辞から見てゆきたい。『王昌齡詩集』の諸本や『全唐詩』が、「出塞」二首の第一首として収録する（第二首は「驢馬新跨白玉鞍、……」ほか、「塞上行」（『才調集』）、「塞上曲」（『文苑英華』、二首の第一首）、「從軍行」（『万首唐人絶句』、五首の第四首）など、異同が多い。とりわけ興味深いのは『樂府詩集』で、卷二十一・横笛曲辞に「出塞」二首の第一首として収めるとともに、卷八十・近代曲辞には、「蓋羅縫」二首の第一首として採録している。（第二首は「音書杜絶白狼西、……」の句で始まる「春怨」。）

「蓋羅縫」については詳細が不明であったが、任半塘『唐声詩』（上海古籍出版社、一九八二年）によつて、その由来が明らかになった（下冊五〇六―七頁）。任氏の考証によれば、南詔王閣羅鳳の名に因んだ唐の教坊の曲で、『教坊記』に「合羅縫」とあるものと同じという。『旧唐書』卷一百九十七・南詔伝には、天宝七載（七四八）に即位した閣羅鳳が、天宝九載、雲南太守の張虔陀を怨んで反旗をひるがえし、彼を殺して後に吐蕃に臣従したとの記事が見える。ここから推測して「蓋羅縫」の制作は、閣羅鳳の即位から反乱ま

での間、つまり玄宗の天宝七―八載というのが任氏の説である。

王昌齡の七言絶句が生前から有名で、楽人たちに歌われていたことは、唐の薛用弱『集異記』が載せる逸話<sup>2)</sup>からも窺い知られるが、『樂府詩集』の「蓋羅縫」は、それを一層確かなものとする資料と言えよう。またここから「出塞」の制作時期を、この天宝七、八年より以前と区切ることもできる。<sup>3)</sup>

なお、「蓋羅縫」の詩句は次のとおりで、幾箇所か異同が見られる。

秦時名月漢時關	秦時の名月	漢時の関
萬里征人尚未還	万里の征人	尚お未だ還らず

但願龍庭神將在	但だ願う	龍庭の神將の在りて
---------	------	-----------

不教胡馬渡陰山	胡馬をして陰山を渡らしめざるを
---------	-----------------

任氏が述べるように「蓋羅縫」は、すでに世に広まっていた昌齡の「出塞」を歌詞として採り入れたものと考えられる。字句の改変は、おそらくそれに伴うものであろうが、これによって作品から受ける印象は、かなり異なったものとなる。

「出塞」の「長征一人一未還」を「征人一尚未一還」とあらためた第二句は、「萬里」と「長（征）」の意味上の重複を省いた上で、「人」を「征人」と具体的

にし、句全体を第一句と同じ2・2・2・1のリズムに整えて流れをよくしている。ただ逆にその分、前半二句が平板になったことは否定できない。「秦時―名月―漢時―關」という名詞の積み重ねで構成された第一句を受けるには、「蓋羅縫」の「萬里―征人」と続く名詞の繰り返しよりも、動詞的に働く「長征」の二字を置き、さらに下三字「人―未還」でリズムの単調な流れにわずかな抑制を効かせた「出塞」の方が、変化があつて優れる。意味的にも第二句の「人未還」三字は重く、リズムの変化に伴つて生ずる停頓（ないしは、停頓によつて「人」一字にかけられてゆく比重）は、その意味的な重さを増幅させる働きをしていると言えよう。また、重複するかに見える「萬里―長征」も、作品中ではむしろ悲劇の遠征を強調して効果的である。

続く第三句の異同は、一層顕著な影響を作品全体に及ぼしている。殊に「但使」から「但願」への改変は、わずか一字ではあつても、無視できない意味合いを持つ。「出塞」の「但使……」の場合、後半二句の意味は「ただ龍城の飛將軍李広のような武將さえいてくれたならば、胡騎に陰山を越えさせはしないものを」であつて、小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、一九五八年）

が説くように、「兵士の力は決して弱くない。名將こそが必要だ」という力強さを言外に読み取ることができる（二三―四頁）。これに対して「蓋羅縫」の「但願龍庭神將在、不教胡馬渡陰山」は、「ただ願うのは龍庭の神將のごとき勇者がいて、胡の騎馬兵に陰山を越えさせないでくれること」と、名將の出現と活躍にひたすら縋ろうとする意味に限定される。歌詞としては「但使……」よりも分かりやすい表現と言えるが、これによつて「出塞」詩が△含み▽として持つていた力強さは影をひそめ、単純な陰影を欠いた内容とならざるを得ない。

「出塞」と「蓋羅縫」の異同は、一見したところ、さほど大きなものとも思われない。しかし、わずか数字の改変によつて「蓋羅縫」の歌詞は、リズムカルで平明ではあるけれども平板な、凡作に姿をかえてしまつてゐる。このことは逆に言えば、「出塞」詩の表現の、一字の緩みもない完成度を示す証左にほかならないのである。

### 三

前節では題辭から始めて、すでに詩句の内容にまで

論じ及んだけれども、ここであらためて「出塞」の四句に注目してみたい。

著名な冒頭句「秦時名月漢時關」については、多様な解釈が可能である。拙訳はひとまず逐語的に直訳するかたちを取った。しかし、明の唐汝詢『唐詩解』以来の説にしたがって、この句を「互文」の修辭法によると捉え、「秦漢以来の名月と関所」の方向で理解する解釈が、あるいは一般的かもしれない。いずれにせよ、月明かりに照らし出される関塞の情景を、「秦」「漢」という時間的・歴史的な要素を織り込んで歌いあげた巧みな描写は、承句「萬里長征……」の空間的な要素と呼応し合って、絶妙の詩的効果を發揮している。ところで、この「名月」に関してはさらに異説がある。たとえば、漢の揚雄「羽獵賦」の「機槍爲關、名月爲候」に典故を求める、明の楊慎「升庵詩話」の説（巻二）。あるいはさらに、唐の楊炯「折楊柳」の句「望斷流星驛、心馳名月關」を典故に加え、王昌齡のこの句が「名月關」という関所の名を歌い込んでいると考える、江戸期の漢学者戸崎淡園『箋註唐詩選』（巻七）、および山本北山『作詩志彙』の解釈など。しかし、この解釈に無理があることは、『校注唐詩解 釈辞典』（大修館書店、一九八七年）の王昌齡「出塞」

の解説（高橋良行執筆）が詳しく論じているとおりであり、過度の詮索がかえって詩の理解を歪める結果となった例といえる。月明かりの下の関塞という情景は、樂府の題辭「關山月」が示すように辺塞詩に典型的なものである。ただ、そうでありながら、これを「秦」「漢」と結びつけた詩語は意外に少なく、さらに一句七字の中にあわせて歌い込んだ例は、王昌齡以前の詩には見当たらない。したがって、私たちはこの「秦時名月漢時關」の表現に典故を求めるよりも、むしろ昌齡の詩才の独創的な閃きを認めておくべきなのかも知れないが、ただ一つ、北周の庾信「出自薊門行」の一聯だけは、左に挙げておきたい。

關山連漢月 関山 漢月に連なり

隴水向秦城 隴水 秦城に向かう

空間性と時間性を交錯させた、この「漢く」「秦く」の修辭技法には、王昌齡「出塞」の情景描写と明らかに共通するものがある。この場合、これが「出塞」起句のヒントとなったか否かは、さほど問題ではない。

この資料によって、一句を表現史的な観点から捉え直することの方が、むしろ遥かに重要であろう。つまり、ここから私たちは、辺塞詩の表現が庾信においてすでにこの水準に達していたこと、また「秦時名月漢時關」

の名句誕生の下地が、先行する詩人達のこうした表現技法をもとに準備されていたこと、を確認できるのである。

次に第二句の「萬里長征人未還」に目を移すことにしよう。この承句については、簡野道明『唐詩選詳説』（明治書院、一九二九年）が、隋の盧思道「從軍行」の「塞外征人殊未還」を類句として挙げている。しかし、これにはさらに古くもとづくところがある。梁の武帝「子夜四時歌・冬歌四首」の第四首に注目してみよう。それは、次のような一聯で始まっている。

一年漏將盡 一年 漏は將に尽きんとし  
萬里人未歸 万里 人は未だ帰らず

この詩は『玉台新詠』巻十にも収められており、当時は比較的著名な作品だったと考えられる。「萬里人未歸」の句は、おそらく昌齡の念頭にあったのではないだろうか。このように見ると王昌齡「出塞」の傑出した描写句も、樂府題邊塞詩の擬古的な伝統と、詩歌の表現史の発展的な流れに沿って生まれたものであることが、あらためて確認されるのである。

続いて後半の二句へと進みたい。転句の「但使龍城飛將在」については議論が多い。ここに言う「飛將」とは、拙訳に示したとおり漢の將軍李広をさす。『史

記』の記事によって著名なこの悲劇の武將は、匈奴から「飛將軍」と恐れられた名將であり、しばしば詩歌にもうたわれる。ただ史実の上では、匈奴の本拠地龍城に攻め入って手柄をあげたのは李広ではなく衛青であり、ここから転句の解釈をめぐって問題が生じることになる。この句の矛盾を合理的に解こうとして、たとえば、①『唐百家詩選』等が「龍城」を「盧城」に作るのを正しいとし、李広の任地である右北平の盧龍とする説、②「龍城」は唐代の營州の古称であり、この地名で李広の任地右北平を指しているとする説、③「龍城」は李広の籍貫である隴城のことを言うとする説等が、最近に至るまで次々と発表されてきた。しかし、高橋良行「王昌齡「出塞」詩札記——龍城飛將」の解釈をめぐって——（『中国詩文論叢』第四集、一九八五年）および前掲『校注唐詩解詠辭典』の解説（同氏執筆）の詳細な論考が明らかにしているように、これらの諸説には、詩の表現に論理的な整合性を求める余り、かえって無理を生じているところが感じられる。高橋氏が結論づけるように「龍城」は、異民族の本拠地・聖域、さらには異民族との戦闘空間・軍事的要害の意味で邊塞詩に頻用される詩語であり、それが同じく常用される漢民族の英雄「飛將軍」李広と結び

ついで、史実の細かな制約を越えた新しい詩表現を生み出していると見ておくべきであろう。

解釈をめぐっては様々な議論を呼ぶ「龍城飛將」であるが、「龍…飛…」の二字のイメージが喚起する躍り上がるような力強さは、前半二句の悲涼感に満ちた静けさを受けて、転句としての役割を見事に果たしている。(仮に先の①説に従って、「龍城」を「盧城」にあらためるならば、詩的効果は半減しよう。)とこそ、この転句と結句「不教胡馬度陰山」をむすぶ「但使…不教…」の構文は、六朝から初唐の詩に「但使…何須…」「但令…不…」などの先例が散見され、句法としては特に珍しいものではない。また結句の「胡馬」「陰山」も、転句の「龍城」「飛將」と同様、詩語としての新奇さを持つわけではない。ここにも、伝統的典型的な語彙・詩表現によりつつ、辺塞詩に新鮮な風を送り込んだ、王昌齡の技法と技量を見ることが出来る。なお、この後半二句に関しては、沈德潜『說詩碎語』が、高適「燕歌行」の末句「君不見沙場征戰苦、至今人憶李將軍」との発想の類似に言及している。興味深い指摘であるが、私としてはさらに「但使…不教…」と結びつけて、盛唐の崔湜「大漠行」の末尾の一聯を、次に挙げておきたい。

但使將軍能百戰 但だ將軍をして能く百戰せしめば  
不須天子築長城 天子の長城を築くを須いざらん  
ほほ同じ構文によつて歌い上げられた二句の意味するところは、言葉こそ違え王昌齡と変わらぬ。「出塞」詩の後半も、このように当時の詩的発想・表現を土壤とし、そこから生み出された秀句だったのである。

#### 四

以上、王昌齡の「出塞」詩について、先行する類似表現の指摘を中心に述べてみた。今の私には、さらに表現史などの問題へと本格的に踏み出す準備はなく、この短い文章も散漫な内容の「札記」として終えざるを得ない。最後に視線を逆に向け、これよりも後の唐詩を一瞥して、結びに代えることにしたい。

王昌齡「出塞」を引き合いに出して論じられる後出の作品には、たとえば『唐詩選』所収の作者不詳の「胡笳曲」がある。おそらくは中晩唐期の作と思われるこの絶句の後半二句が、昌齡の詩を思い起こさせるのである。

月明星稀霜滿野 月明らかに星稀まれにして 霜は野に

満つ

氍毹車夜宿陰山下 氍毹車、夜に宿る 陰山の下

漢家自失李將軍 漢家 李將軍を失いしより

單于公然來牧馬 單于是公然と來りて馬を牧す

「李広のような名將がいたならば……」と結んだ王昌齡「出塞」に対し、この詩はそれを反転して用いているように見える。作者がここで、昌齡の詩を意識しているか否かについては、断定的な結論を下しにくい。

しかし、高木正一『唐詩選』（朝日新聞社、一九六六年）が転結二句を昌齡の作品と比較し、「同じ故事を詠じながら、なぜか、これには盛唐詩に見られたような、たくましい精神が欠けている」と指摘するように（下冊、六三二～三頁）、詩史的・表現史的な観点からしても、興味深い資料であろう。

昌齡「出塞」との類似ということで言えば、別に取上げておきたい作品が一篇ある。それは、同じ『唐詩選』に見える蔽武の七言絶句、「軍城早秋」である。

昨夜秋風入漢關 昨夜 秋風 漢関に入り

朔雲邊月滿西山 朔雲 辺月 西山に満つ

更催飛將追驕虜 更に飛將を催して驕虜を追わしむ

莫遣沙場匹馬還 沙場の匹馬をして還らしむること

莫かれ

この詩は、成都に節度使として赴任した蔽武が、広

徳二年（七六四）、侵入した吐蕃を討つた際に詠じた作品である。<sup>(1)</sup> うっかり見過ごしかねないが、後半二句は、昌齡「出塞」の「但使龍城飛將在、不教胡馬度陰山」の変奏と言える内容となっている。前半二句の「漢關」「邊月」も、「秦時名月漢時關」の詩語と重なり合う。<sup>(2)</sup> さらに韻字に注目してみると、「關」「山」「還」の三字は、順序は異なるものの「出塞」とすべて同じである。こうした点からすると、この作品と王昌齡「出塞」との距離は、先の「胡笳曲」よりも一層近いといえる。<sup>(3)</sup>

ただし、この場合においても、昌齡の「出塞」がどこまで蔽武に意識されていたかを、正確に推定することは難しい。作詩の際、先ず意識されるのは、おそらく辺塞詩一般の表現世界であって、一篇の作品ではない。そして「漢關」「邊月」「飛將」のいずれもが当時の辺塞詩に見られる通常のイメージである以上、蔽武の意識において昌齡「出塞」が、辺塞詩一般のうちに完全に埋没していた可能性も、十分考えられるからである。

結局のところ、この蔽武の「軍城早秋」にせよ、あるいは先の作者不詳の「胡笳曲」にせよ、王昌齡「出塞」との影響関係について確実なことは言えない。し

かし、こうした後出作品に垣間見られる類似性が、昌齡のこの著名な作品の、絶句辺塞詩としての優れた典型性を示していることは確かであろう。そして、意識的にせよ無意識的にせよ、後出の作品がその表現世界にたぐり寄せられているとすれば、それはとりもなおさず、王昌齡の「出塞」が到達した、辺塞詩の一つの頂点としての位置を示しているのではないだろうか。

[注]

1…「庄卷」の評は、明の王世貞『芸苑卮言』巻四に、李攀龍の言葉として引かれる。「神品」の評は、明の楊慎『升庵詩話』に見える（『歴代詩話統編』本巻二）。

2…「旗亭画壁」あるいは「旗亭賭唱」の故事として知られている。王之涣（『集異記』では王渙之に作る）、高適、王昌齡の三詩人が長安の旗亭で酒を飲み、居合わせた梨園の伶官や妓女たちの歌に、何首自作の作品が含まれるかで優劣を競ったという逸話。この話の中では、王昌齡の七言絶句「芙蓉樓送辛漸」「長信秋詞」二首が、伶官によって歌われる。小説

的な色彩が強く史実とは言いがたいが、当時七絶が歌唱されたことを示す資料として、貴重な意味を持つ。

3…天宝七、八載といえば、昌齡が罪を得て龍標尉に流された晩年にあたる。したがって、「出塞」の制作時期をいまひとつ絞り切れない不満は残るが、年代不明の作品が大多数を占める王昌齡の七絶辺塞詩にあつては、重要な傍証資料といえる。

4…『樂府詩集』は、「神將」の「神」字の下に、「一作飛」と注記する。なお、「龍庭」は匈奴の王庭をいう。

5…清の沈德潜『說詩晬語』も、この句が「互文」の修辭法によっていると見る。

6…「秦一月」「漢一關」という結びつきを持った言葉は、昌齡以前の詩には見当たらない。もっとも、「月」「關」が逆に結びついた「秦關」「漢月」などの語まで含めると、宋の鮑照「簫史曲」の「龍飛逸天路、鳳起出秦關」（『藝文類聚』は晋の張華の作とするが、遠欽立の指摘により、『樂府詩集』が鮑照の作とするのに従う）、北周の庾信「怨歌行」の「胡塵幾日應盡、漢月何時更圓」、王褒「燕歌行」の「無復漢地關山月、唯有漠北蘆城雲」（『樂府詩

集』は「關山月」を「長安月」に作る)、さらには陳の張正見「明君祠」の「寒樹暗胡塵、霜樓明月」、徐陵「出自薊北門行」の「漢月帶胡秋」など、数は多くないが六朝詩から幾つか拾い上げることができ、ただ、これらの「秦」「漢」は王朝名ではなく、秦の地、中華の地といった空間的なイメージで用いられているようである。

下って初唐期になると、初唐四傑のうち盧照鄰・駱賓王の詩に、「秦塞」「漢月」「漢時」などの語が散見される。なかでも注目されるのは、盧照鄰「贈許左丞從駕萬年宮」詩の「漢時光如月、秦祠聽如雷」、「行路難」の「漢家陵樹滿秦川」であり、「漢々」「秦々」の併用が見える。(ただし、「行路難」の「秦川」は川の名。)しかし、「出塞」詩「秦時名月漢時關」との距離は大きく、典拠とは言い難い。

なお、拙稿中の詩の引用は、遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』と『全唐詩』によった。

7…注6の初唐詩に続いて盛唐詩に目を向けてみると、崔颢の「行經華陰」詩の「河山北枕秦關險、驛樹西連漢時平」、李白の「王昭君」詩の「漢家秦地月」のような、昌齡「出塞」の表現にかなり近い例が搜

し出せる。まだ十分な調査はできていないが、少なくともこのように資料をたどることによって、王昌齡の「出塞」は、六朝詩から唐詩に至る表現史のなかに位置づけられるはずである。

8…唐代になると、初唐の王勃「秋夜長」詩に「征夫萬里戍他鄉」の句が見える。また、李白「戰城南」にも「萬里長征戰」の句がある。

なお、「長征」の語は、六朝以前の詩では陳の顧野王「有所思」に、「還聞雉子斑、非復長征賦」として唯一見られるのみである。唐代に至って郭震「出塞」詩の「長征馬不肥」、李頎「古意」詩の「男兒事長征」など、やっと幾つか用例が拾えるようになる。ここから推測すると、詩語としての「長征」は、当時意外に新鮮な響きを持つ言葉だったのかも知れない。

9…清の閻若璩『潛邱劄記』巻二に見える説で、近著では陳友琴『長短集』(浙江人民出版社、一九八一年)所収の「關於「龍城飛將」が、これを支持する。10…王麗娜「龍城飛將“還是”盧城飛將“?”」(『光明日報』一九八五年二月二六日号)など。

11…王秉鈞「龍城飛將“考釈」(『蘭州大学学報』社

会科学版』一九八三年第二期)、孫其芳「龍城試解」(『文学遺産』一九八〇年第三期)など。

12…「龍城飛將」の解釈については、この他に、張標「龍城考」(『河北師範大学学报「社会科学版」』一九八五年第二期)が参考になる。なお、王昌齡の「出塞」をめぐる諸説については、高橋氏の二篇の文章から受けた教示が、大変有り難かった。

13…たとえば、齊の孔稚珪「白馬篇」詩の「但使強胡滅、何須甲第成」、梁の吳均「贈別新林詩」の「但令寸心是、何須銅雀臺」、北周の庾信「暮秋野興賦得傾壺酒詩」の「但使逢秋菊、何須就竹林」、初唐の盧照鄰「劉生」詩の「但令一顧重、不吝百身輕」、駱賓王の「從軍中行路難」詩の「但令一被君王知、誰憚三邊征戰苦」など。ただ、「但使…、不教…」は、管見の限りでは見当たらない。

14…「龍城」「飛將」の用例については、前掲の高橋論文に詳しい。

蛇足の嫌いはあるけれども、念のため「胡馬」「陰山」についても一言触れておく。「胡馬」は、西北域の異民族の地に産する馬を総称し、転じて異民族の騎兵・軍隊の意味となる。同義の「胡騎」ほどではないが、辺塞詩にしばしば用いられる。たと

えば、晋の陸機「從軍行」の「胡馬如雲屯、越旗亦星羅」など。王昌齡のこの詩の場合、ひとつには平仄の制約もあつて「胡馬」としたのであるうが、意味の面からみても、直接的な「胡騎」より含蓄があつて優れる。「陰山」は中国西北部に横たわる大山脈で、顔延之「從軍行」が「漢世爭陰山」と歌うように、漢代においては、自然が造るこの境界を舞台に、異民族との戦いが繰り広げられた。用例はそれほど多くないが、やはり辺塞詩に散見される。同じ陸機の作品から例を挙げれば、「飲馬長城窟行」の「驅馬陟陰山、山高馬不前」など。

なお、「胡馬」「陰山」の併用例は初唐以前の詩には見られない。管見の限りでは、李白の「塞上曲」の「五原秋草綠、胡馬一何驕。命將征西極、橫行陰山側」が、王昌齡と並ぶ早い例である。

15…「大漠行」は、唐の撰者不詳の『搜玉小集』には、崔湜の作として収められる。崔湜は、王昌齡よりもやや早い、初唐末から盛唐にかけての人である。しかし、『文苑英華』卷三三三三は、胡皓の作とする。

胡皓は盛唐の人。ここでは、より古い資料である『搜玉小集』に従つておく。

16…森槐南『唐詩選評釈』(新進堂、一八九七年)、

簡野道明『唐詩選詳説・下』、高木正一『唐詩選・上』（朝日新聞社、一九六五年）などに指摘がある。

17 嚴壽激・黃明・趙昌平『鄭谷詩集箋注』（上海古籍出版社、一九九一年）によれば、元の楊士弘『唐音遺響』巻十五に鄭谷の作としてこの詩が載るけれども、その根拠は不明とのことである。同書は続けて、この作品は鄭谷の詩集には見えず、沈德潜『唐詩別裁』も無名氏の作として載せる（巻二十）、と指摘する。（四五九頁「軼詩存疑詩」）

18 起句「月明星稀霜滿野」の「月明星稀」は、魏の武帝曹操「短歌行」の「月明星稀、烏鵲南飛」を踏まえている。しかしそれと同時に、中唐の張繼「楓橋夜泊」の起句、「月落烏啼霜滿天」にもヒントを得ていると思われる。詩風も初盛唐期とは異質に感じられるところから、中晩唐の作と考えてほぼ間違ひなからう。

19 この詩に対する杜甫の唱和の作、「奉和嚴武軍城早秋」も『唐詩選』に収められている。

20 ただし、嚴武の詩に見える「漠關」は中国の関所の意味であり、この点、昌齡「出塞」の用例とは異なる。しかし、字面の類似性にも注目しておくべきであろう。

21 話題がやや逸れるけれども、これに関連して私が興味深く感じているのは、作者嚴武の父親の存在である。『唐書』の本伝によれば、彼は名を挺之といひ、名宰相姚崇に認められて中央政界に入った。考功員外郎の職に在った時、開元十五、十六の二年にわたって知貢舉を勤めているが、実は、この開元十五年の合格者の一人が、他ならぬ王昌齡だったのである（徐松『登科記考』巻七）。嚴挺之と王昌齡の交往については、贈答の詩文等が残されておらず、具体的に知ることはできない。しかし、当時科舉の主試官と合格者は「座主」「門生」と称し、「門生」の「座主」に対する深い感謝の念は終生にわたったという。当然、王昌齡もそうした強い絆の下で、嚴挺之との交往を続けたと想像される。とすれば、嚴武にとつて王昌齡は、単に著名な詩人というだけにとどまらず、父の「門生」の一人という、近しい感情の対象でもあったはずである。そのような王昌齡の、「蓋羅縫」の歌詞にまでなった著名な作品を、嚴武が知らなかったとは考えにくい。辺塞詩に関する彼の知識のなかに、王昌齡の「出塞」が含まれていたことは、ほぼ疑いない。